

中山間地に適する飼料用米品種「みなちから」の安定多収栽培法					
[要約] 中山間地における「みなちから」の移植適期は5月中旬～下旬で、施肥量は基肥6 kg/10a、穂肥3 kg/10a、晩期穂肥4 kg/10a（窒素成分計13kg/10a）が適量であり、栽植密度は11.9 株/m ² までの疎植栽培が可能で、安定多収栽培ができる。					
佐賀県農業試験研究センター 三瀬分場 山間稲作研究担当			連絡先	0952-56-2040 nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp	
部会名	作物	専門	栽培	対象	水稻

[背景・ねらい]

佐賀県の中山間地では、行政や農業団体から飼料用米品種の作付けが推進されている。農業者からは、飼料用米品種の安定多収栽培技術の確立が求められている。

そこで、中山間地に適する飼料用米品種として選定した「みなちから」の安定多収栽培技術を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 「みなちから」の移植期は5月中～下旬が適期で、多収となる。6月以降では収量低下が大きく、冷夏年次には成熟期未達となる可能性がある（表1）。
- 施肥量は、基肥6 kg/10a、穂肥3 kg/10a、晩期穂肥4 kg/10a を施用すると稈長は短く、安定多収となる（表2）。
- 標準の栽植密度（18.0 株/m²）に比べ、栽植密度11.9 株/m²までの疎植栽培を行っても、収量の減少は認められず、多収栽培が可能である（表3）。

[成果の活用面・留意点]

- 耐冷性は‘やや弱’のため、5月上旬より早い移植は避ける。
- 肥料の施用時期は、基肥は植代日同日、穂肥は出穂前25日頃、晩期穂肥は出穂前10日頃を目安とする。
- イネごま葉枯病には弱いので、登熟期に根腐れを起こすような水管理を避け、間断灌水を徹底するとともに、秋落防止のため鉄含有資材や堆肥の施用に努める。
- イネ稲こうじ病、イネ墨黒穂病の防除は、シメコナゾール粒剤（モンガリット粒剤）および、塩基性塩化銅水和剤（ドイツボルドーA水和剤）の効果が高い。
- ベンゾピシクロン、メソトリオン、テフリルトリオンなどトリケトン系4-HPPD阻害型除草剤成分を含有した除草剤は絶対に使用しない（除草剤の薬害で水稻が枯死する）。

[具体的データ]

表1 「みなちから」の移植期と生育、収量の関係

試験区名	移植期 (月.日)	出穂期 (月.日)	成熟期 (月.日)	穂数 (本/m ²)	粗		玄米
					玄米重 (kg/10a)	同左比 (%)	千粒重 (g)
5月中旬移植区	5.16	8.03	9.25	243	862	(100)	27.1
5月下旬移植区	5.26	8.13	10.09	242	790	92	27.4
6月上旬移植区	6.10	8.23	10.14	274	553	64	24.6

* 2016年の試験成績。機械移植、栽植密度 17.8株/m²。

表2 「みなちから」の施肥法と生育、収量の関係

試験区名	施肥量(N kg/10a) (基肥-中追-穂肥-晩期穂肥-実肥)	窒素	稈長 (cm)	粗		倒伏 程度 (0~5)
		合計 (kg/10a)		玄米重 (kg/10a)	同左比 (%)	
標準施肥区	6-0-3-4-0	13	69	817	(100)	0.0
実肥施用区	6-0-3-0-4	13	70	780	95	0.0
基肥増肥区	9-0-3-4-0	16	79	843	103	0.0
基肥一発肥料区 ⁴⁾	10-0-0-0-0	10	68	687	84	0.0

1) 2016~2017年の2ヵ年平均値を示した。

2) 移植期は5月22日(2016年)、5月19日(2017年)、機械移植、栽植密度 17.8株/m²。

3) 肥料は、基肥は「BB464特号」を、追肥は「BB602」を使用した。

4) 肥効調節型基肥一発肥料は「ヒヨクモチ一発くん」を使用した。

5) 収量は、粗玄米重を示した。

6) 倒伏程度は0(無)~1(微)~2(少)~3(中)~4(多)~5(甚)で示した。

表3 「みなちから」の栽植密度と生育、収量の関係

試験区名	栽植	穂数 (本/m ²)	粗		倒伏 程度 (0~5)
	密度 (株/m ²)		玄米重 (kg/10a)	同左比 (%)	
標準区	18.0	250	831	(100)	0.0
やや疎植区	15.4	232	814	98	0.0
疎植区	11.9	213	820	99	0.0

1) 2016~2017年の2ヵ年平均値を示した。2ヵ年とも5月26日機械移植。

2) 施肥量は6-0-3-4-0(T-N 13kg/10a)の標準施肥。

[その他]

研究課題名：中山間地における飼料用・米粉用米品種の選定と栽培法の確立

予算区分：県単

研究期間：2014~2017年度

研究担当者：松本和大、平 博之